第７分科会

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿をふまえた保育実践」

助　言　者　横峯　孝昭（鹿児島女子短期大学 児童教育学科 教授 学長補佐（教務担当））
司　会　者　池水奈留美（コスモス幼稚園）
問題提起者　森田　美帆（枕崎幼稚園）
記　録　者　朝倉　俊江（枕崎幼稚園）
運営委員　永野　美穂（長野幼稚園）

【研究課題】

子ども理解

【研究・研修の視点】

少子高齢化や核家族化の進展，共働き家庭の増加，家族の在り方や家族を取り巻く環境は多様化している。またコロナ禍以降，地域の中で多様な人間関係を学ぶ機会の減少や保護者とのコミュニケーション不足など，子どもたちを取り巻く環境は大きく変化している。そうした中で，子どもが将来を生きるために必要な体験を園や保育者が計画的に実践し，かつ，それを小学校以降の学びにつなげていこうとする視点が大切である。

私たち保育者は，家庭から幼稚園という集団へ入り，園生活を経験する子どもたち一人一人が，安心して過ごせる環境づくりを心がけている。丁寧な関わりを通し，子どもたちは緊張や不安が軽減し，次第に楽しめる遊びが増え，少しずつ自分の世界を広げていくことができる。

今回の研究では，入園から卒園するまでの子どもたちの成長の過程を見守る中で，様々な人や物との関わりを通した多様な体験が，いかにして子どもたちが主体的・対話的な深い学びにつながっているのか。幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえ，その場面における幼児の姿をエピソードで取り上げ，その体験が「子どもの視点」に立ってみた時に，学びの経験や理解につながっているのか，子どもたちが見せる様々な姿から，どのような計画・保育実践が必要かを考えてみた。

【研究・研修の手がかり】

- 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿は，だんだんと育っていくという観点から，現在の年長児の育ちを写真や動画，記録などから拾い，各年齢における姿を探る。
- 自然体験活動やカブトムシの飼育，描画製作活動などの具体的な事例から，その活動を通し見えてくる子どもたちの姿から，保育者としてどのような援助や環境設定が大切であるかを考える。

【研究計画】

（令和６年度）

- 幼稚園生活を通して，協同性の育ちを考える。

（令和７年度）

- 各年齢の目指す幼児像から，主体的・対話的で深い学びにつながる幼児の姿をエピソードで取り上げ，保育実践を深める。

【発表の概要】

⑴　研究・研修テーマの捉え方

幼稚園生活を送る中で，子どもたちは様々な人や物とかかわり，その体験が増えていくことで主体的・対話的な深い学びにつながっている。そこで，園生活の中でのエピソードをいくつかあげ，「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」がどのように生かされているかを保育者間で話し

合いながら，子どもたちの発達や学びの連続性に注目し実践を行った。

⑵　研究の内容

園での生活や遊びを通して，どのような体験が主体的・対話的な深い学びにつながっているのか，現在の年長児が入園当初から年少，年中，幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿との関連性をみて，今後どのような体験や計画が必要であるか考える。

⑶　研究の方法

ア　子どもたちの写真や動画，記録などから研究内容に沿った子どもたちのエピソードをあげる。

イ　アから拾いあげた子どもの姿から，幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿との関連性をみて，どのような計画・保育実践が必要かを考える。

⑷　実践例

ア　自然花での体験活動

イ　カブトムシの飼育

ウ　製作遊び（ダンボール製作へ）

⑸　まとめ

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた保育実践」というテーマで，入園当初から現在の年長児の育ちを振り返り，研究を通してみえてきたことは，「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」は，遊びを通した総合的な指導を通して育っていくということだ。私たちは，日々の保育の中での子どもたちの行動や発言を振り返って，共有している。その中から見えてきた反省や課題，また子どもたちが興味・関心のある事柄に注目し，子どもたち自身がやってみたいと思える教材研究や環境構成，子どもたちがいかに活動や遊びに熱中し，充実させていくことができるか検討していくことが重要だと考える。カブトムシの飼育の活動では，昆虫が好きな子どももいれば，苦手な子どももいる。また，製作活動の得意な子どももいれば，苦手な子どももいる。子ども一人一人の内面や特性を理解した上での保育者の関わりも重要である。子どもたちの遊びや活動が充実し，子どもたち自身が楽しいと感じ，活動を展開させていく中で「主体的･対話的で深い学び」を引き出すことができる。また，今回，現在の年長児の成長の過程を振り返り，見えてきたことは，子どもたちの育ちは連続しているということだ。そして，この育ちは，これからも連続していく。子どもたち一人一人が幼児期に身に付けたことを，小学校の教科の学びへとつなげていけるように，小学校との連携の取り方等も工夫していきたいと考えている。今後も，子どもたち一人一人の好奇心を引き出し，感動していけるような関わりや保育ができるよう取り組んでいきたい。

⑹　今後の課題

ア　子どもたちが「やってみたい！」と意欲を示し，「楽しかった！」という満足感や達成感を味わうことができていたか。どこか保育者主導の保育になってはいなかったかを振り返っていきたい。

イ　遊びの環境を整えるだけではなく，保育者が，子どもの何気ない気づきや発見，驚きなどに一緒に感動し，考えることができていただろうか。子ども自身が気づく前に，私たち保育者の方が情報を伝え過ぎ，子ども自身の学びの芽を摘んでしまっていないか反省していきたい。

ウ　コロナ禍以降，地域の方を巻き込む保育が減っていることや，人口が減少している地方のため，公共施設や公共の交通機関の利用が少ない。「社会生活との関わり」と「道徳性・規範意識の芽生え」を育てる環境を考えていきたい。

エ　幼児期に育まれた資質や能力，経験して培った力は，小学校の教科の学びにつながっていくと考える。小学校との円滑な接続のために，連携を図っていきたい。

【討議の柱】

・　子どもたちは，遊びの中でどのように10の姿を学んでいるのか。

・　小学校は０からのスタートではなく，子どもたちの育ちは連続している。小学校教育との接続を意識していることは何か。

【質疑応答】

質問：ダンボール製作時における材料や道具の準備・配置，年齢における工夫や配慮点あったのか。

回答：ダンボール製作は５歳児の活動のため，自分たちで道具を扱うことができるハサミコーナー，ペンコーナー，その他には子どもたちが使用することを予想し，ダンボール以外に色紙，色画用紙，スズランテープ，いろいろな材料を机や部屋の中に準備した。

質問：子ども同士の協力性が多くみられたが，日頃から意識している声かけ，環境構成等はあるか。

回答：日々の活動・保育終了後，保育者間で子どもたちの活動の様子や発言を振り返り，反省，そこから見えてきた課題や活動の改善点やまた子どもたちが興味関心のある事柄に注目し，子どもたち自身がやってみたいと思える教材研究や遊びに熱中し，充実させることができる動線など環境構成を意識している。実際，援助の必要な子どもたちもいる中で，「みんなが一緒に楽しめるにはどうしたらいいか。」ということを子どもたちと一緒に考え，話し合っている。

質問：活動を振り返る中で，子どもたち10の姿がみられたが，最初に計画をたてる時にどのようなねらいを立てていたのか。

回答：年少時の雨の日の散歩の活動の場合，NPO法人自然花の自然豊かな環境の中で子どもたちが身近な事象への関心，自然の変化を感じる，生命尊重などを意識した。保育を振り返った結果，他にもいろいろな10の姿につながる様子がみられ，遊びを通した経験などから総合的な育ちを感じた。

【グループ討議】

① 子どもたちは，遊びの中でどのように10の姿を学んでいるのか。

- 幼児期は，主体性や思いやり，生きる力の土台を作ることが大事なことである。行事が多く，そのための練習ばかりの時期もある。そのために職員間の共通理解を深め，保護者への丁寧な説明など行い，子どもたちが主体的に活動できるような行事を含めた年間行事の見直し，カリキュラム編成など取組みも必要ではないか。
- 10の姿を念頭にねらいを立てると，やらなければいけないことが増えすぎてしまうが，10の姿を念頭に置くことによって活動の計画，子どもたちへの言葉かけがしやすくなるのではないか。個々の姿が重視される中で，同じ目的をもって取組む，協同性を育む保育を多く取り入れ，10の姿に繋がっていくような保育を計画していきたい。
- 園外保育や工場見学やフェリーに乗る体験，園に魚屋さんが実際に魚をさばく様子をみる体験など社会生活との関わりを実施していた。実際に園側が想像していた以上に驚き，不思議，関心をもっていた。
- 保育を振り返るための方法としての記録や写真の取り方などの情報交換が行われた。
- 10の姿を意識しながら保育するのは難しいが，子どもたちの姿が10の姿の何に当てはまるのかを職員間で共有している。その中でも社会生活との関わりなど偏りがみられるので，今後どのように成長して欲しいかを10の姿にあてはめながら保育を計画していく。
- 子どもたちのつぶやきや行動，教師の言葉かけや働きかけを振り返ることを大切にし，子どものつぶやきから保育を広げていく大切さ，その発言から教師がどのように受け止めるか，教師の気づきが大切ではないか。
- 登園後の自由保育の時間や公開保育園のように自分のやりたいことを自分のクラスや年齢に関係なく取り組める保育（活動１），クラス年齢ごとの設定保育（活動２）のような取組み方法は，より多くの10の姿に近づいていけるのではないか。また，10の姿を最初から活動計画していくことは難しいが，発表園のように活動した姿から保育を振り返ることで，10の姿に当てはまらない姿があった時に，その姿を意識して活動していくことも大事ではないか。

② 小学校は０からのスタートではなく，子どもたちの育ちは連続している。小学校教育との接続を意識していることは何か。

・ 幼児期にしかできない自然との関わりや，主体的に参加することでの成功体験や失敗体験が成長に大切ではないか。
・ 地域によっては校区ごとに情報交換が行われている。その中で，入学半年前のアプローチプログラムや入学後のスタートプログラムの交換や小学校の生活科の授業で市内幼稚園・保育園が利用している施設を利用されている地域もあった。
・ 小学校教諭経験者の方が，就学後の子どもたちのことが心配ではあるが，小学校の一年生の先生もプロなので，工夫して時間配分も行っている。学校側も，園からの子どもたちの細かな情報が子どもたちの支援に繋がる。
・ 自分で考えて動く力や基本的生活習慣など保護者とも協力して就学に取組んでいくこと。

【助言者のまとめ】

〇助言者：横峯 孝昭先生（鹿児島女子短期大学 児童教育学科 教授 学長補佐（教務担当））

１.「子ども理解」子どもの言葉や行動から見る学びを可視化

子どもたちが園生活の中で体験・活動した中から発せられた子どもたちの言葉が面白く，保育の振り返りの中でその言葉を上手に拾い，この言葉や行動を幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連性を見ていた。子どもたちの発言の中には，意味深いものが多く，子どもがどのような発想をもち，考えているかを捉えていた。また，発達がわかる言葉などに気づき，成長をしていると拾いあげ，遊びを広げていた。研究課題の「子ども理解」として，子どもたちの発達している姿，子どもたちの気づきや疑問の言葉を聞く力，言葉を拾う力，記憶している力などが必要である。そのためには，個々の子どもの発言の記録を取るということが重要である。資料の写真の子どもが何かを見ている時は，必ず何か活動しているときである。写真からみえた子どもたちの気づきの様子，つぶやきを残し，次の計画をたてていく。このことが将来の学びにつながっていく。

２．行事・カリキュラムの見直し

教育を幼児教育から成人の生涯教育というところまで考えた時，一般的に勘違いされがちではあるが，10の姿はチェック項目ではなく，幼児期の終わりまでに育ってほしい姿をみんなで共有しながら，そこを踏まえた土台づくりの保育実践が行われていくことではないか。計画を立て，実践し，振り返ってみると子どもたちの発言や行動からいろいろな育ち，または，弱い部分等を精査し，次年度の計画（カリキュラムマネージメント）をどのようにしていくかが重要になっていく。教育の現場はビルドアップが好きである。その結果，園行事が多くなる。この行事は何が育つのか，また同じような行事は減らせないだろうかなど保育を見返し，年次計画を立てていくことが重要ではないか。

３．小学校との連携・接続について

発表園の活動は，小学校教育を見据えた「経験」ができる内容となっており，幼児期の学びという意味ではとても良い内容なのではないかと思っている。子どもたちの姿，発言を取り上げ，今後の学びにつながる姿，発言が多くみられた。保育者として，先を知っていることは必要なのではないか。そして小学校教育との接続を頭の片隅に置いておく必要性は大きいのではないか。

また，小学校との連携・接続といっても現状としては難しいことも理解している。規模が大きければ大変であるが，無理で終わらせるのではなく，無理のない方向でやっていけるとよいのではないか。例として薩摩川内市の水引小学校と保育園では，学校だよりや園だよりを掲示し，双方が毎月のおたよりから情報収集（交換）を通し，どのような教育を行っているのかを見通しながら，今後，どのようにやっていくのかを検討している。このように連携の接続の入口として，それぞれの園が実践できるとよいのではないか。